

山田邦明著

『鎌倉府と地域社会』

(同成社中世史選書 16)

同成社 二〇一四・一〇刊
A5 三五六頁 八〇〇〇円

すでに山田氏には、南北朝・室町時代の関東地方に関し、鎌倉府を中心とする当時の政治・社会状況を解明した前著『鎌倉府と関東—中世の政治秩序と在地社会』（校倉書房、一九九五年）がある。本書は、それにつづく二冊目の論文集であり、やはり南北朝・室町時代の関東にかかわる論考が収載されている。

まず第Ⅰ部「鎌倉と鎌倉府」では、序章「足利尊氏と関東」で尊氏の三度目の関東下向計画が観応の擾乱後の政情不安によって実現しなかったこと、第一章「室町時代の鎌倉」で鎌倉府政権が所在する鎌倉が室町時代にもなお一定の繁栄をみせていたこと、第二章「遍照院頼印と鎌倉府」で鶴岡八幡宮の供僧頼印が鎌倉公方をはじめ広範な人びとと交流をもっていたこと、第三章「犬懸上杉氏の政治的位置」で関東管領もつとめた犬懸上杉氏の勢威が想像以上に大きかったこと、第四章「鎌倉府の八朔」で鎌倉府の八朔行事がその後古河府、北条氏、そして徳川氏にも受け継がれていったこと、等を指摘する。

つぎに第Ⅱ部「関東の地域社会」では、第一章「南北朝・室町期の六浦」で鎌倉に隣接する六浦荘が経済・交通の要地として鎌

倉時代以後も繁栄していたこと、第二章「中世三浦の寺院とその展開」で三浦半島の寺院勢力が各宗派独自の展開をみせながらも全体的には戦国時代以降急速に拡大すること、第三章「古代・中世の江戸」で中世江戸郷がやがて周辺の郷村を含めた広域的地名へと発展すること、第四章「上総佐坪にみる室町期の在地社会」で鶴岡八幡宮領である佐坪郷・一野村の事例から室町時代の郷村のあり方が戦国時代以降のそれとは大きく異なっていたこと、第五章「宇塚道慶の活躍」で下野日光山領の代官をつとめる道慶が領主と百姓のあいだに立つて巧みに所領支配にあたっていたこと、第六章「香取の小字と天正検地」で天正一九年（一五九二）に実施された下総香取神社周辺の検地において作業の順番に応じたその小字名が検地帳に記載されたこと、等を論じている。

最後に第Ⅲ部「史料に迫る」では、第一章「常陸真壁氏の系図に関する一考察」で南北朝時代の真壁氏の系譜を「真壁文書」をもとに復元し、第二章「香取文書にみる中世の年号意識」で改元の翌年を「元二年」とする意識の存在を指摘するほか、付論「真壁氏の家臣団について」で真壁氏の実権が室町時代後期までには一族中から重臣層へと移行することをあきらかにしている。

本書には、前著刊行後の論考にくわえて、前著以前に公表され、前著には未掲載だった論考もあわせて収載されている。本書の刊行によって、山田氏の南北朝・室町時代の関東地方に関する研究成果がほぼ集大成されたわけで、この機会にぜひ一読をお勧めしたい。

(江田郁夫)